

## 第8章 日本列島及びアジア大陸の薬物資源

|       |                                                                                                              |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Mikage, Masayuki<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/2479">http://hdl.handle.net/2297/2479</a>                                |

## 第 8 章

### 日本列島及びアジア大陸の薬物資源

金沢大学大学院自然科学研究科生命科学専攻

御影 雅幸

email: mikage@mail.p.kanazawa-u.ac.jp

#### 1. はじめに

西洋医学が台頭して広く人々が平等にその恩恵を受けることができるようになる以前は、わが国においても病気の治療は多くは民間療法に依存してきた。西洋医学導入以前のわが国の医療は中国医学が主流であったが、決して一般庶民にまで行き渡るものではなかった。水戸光國公が藩医の穂積甫庵に命じて、優れた民間療法を収録した『救民妙薬集』をまとめさせ、世に広めたのもその現れであったろう。

わが国への中国医学の導入は、初期の頃は朝鮮半島経由であった。記録に残るもっとも古いものは允恭天皇の時に、天皇の病を治するために新羅から医師金波鎮漢紀武を招来したというものである。当時のわが国の医療がどのようなであったかは想像するしかないが、おそらく加持祈祷の類いの原始医療が広く行なわれていたものと思われる。それに付随した民間薬物療法もあったであろうが、仮にあったとしても、中国医学が導入されてそれと融合しなかったことを考えると、さほど有効かつ繁用されたものではなかったものと思われる。

その後、わが国では中国医学の導入を積極的に行ない、遣隋使船や遣唐使船が活用された。漢方生薬ももたらされたとされるが、量的に不十分であったことは想像に難くない。欽明天皇の時には中国から採薬師が渡来していることから、この頃から積極的に漢方生薬として利用可能な日本産生薬の開発が行なわれはじめたのであろう。現在の和当帰、和厚朴、また木通や防己なども容易に発見されたものと考えられる。やがて、こうした薬物の民間薬的な利用が始まったものと思われる。わが国の民間薬を調査するとき、漢方生薬由来のものが多いことに気付く。

また、医療制度も中国に倣い、大宝律令編纂時に取り入れられた。奈良時代になると、鑑真和尚が渡日し、多数の漢方生薬をも携行されたことが知られており、この頃の薬物が正倉院に納められ、現代にまで伝わっている。

時代が下るに連れて中国大陸においても『新修本草』（唐代）や『図經本草』（宋代）などの図入りの薬物書

が著わされ、わが国にもたらされ、わが国にも本草学が芽生える。そして、いよいよ明代になって、李時珍が『本草綱目』を著わし、出版されるや否やわが国にも伝来し、以後わが国でもたびたび再版され、広く世に広まった。『本草綱目』の特色の一つに、李時珍が自ら調査した各地の民間療法を「单方」としてこと細かく記録している点あげられる。当然わが国の民間療法にも影響を及ぼしたことが考えられるが、この点に関するまとまった研究は未だない。

#### 2. 環日本海域における生薬資源の利用状況

西洋医薬学の発展に伴って、かつての伝統的な医療は急速に衰えた。一方、西洋医学で対処できない病気もまだ多く存在し、そうした中に伝統医学で功を奏するものがあるのも事実である。昨今の伝統医学（漢方また他の代替医学）の復活はその現れと言える。長い経験から生まれたこうした知識の継承もまた重要である。ここでは、環日本海域における生薬利用の現状を述べる。

##### (1) 日本

いわゆる民間薬と呼ばれるものの使用はこの数十年の間に激減した。西洋医薬品が普及したこともあるが、公衆衛生環境が改善され、下痢をはじめとする消化管の病気が少なくなかったことも大きい。下痢の特効薬とされたゲンノショウコの出番はすっかり陰を潜めた。一方、生活習慣病や成人病と呼ばれる病気は現在の西洋医学でも対処しがたいものが多く、民間薬の利用もそうした方向に変わりつつある。癌疾患に用いられる菌類生薬がその最たるものである。過去、現在に利用されてきた民間薬は多い。身近な例として、環日本海域の中央に位置する能登半島に見られる薬用植物を章末に載せる。

##### (2) 韓国

韓国では町中に薬局が林立しており、健康志向は日本人よりも強い。日本における医学は朝鮮半島からの

医師を招来したのが最初とされ、允恭天皇の時代である。以後、しばらく朝鮮半島との医学交流が続いた。当初は中国医学の移入が主であったと考えられるが、民間療法の移入については詳らかではない。植物相もわが国に類似しているの、長い交流の歴史の中で民間薬の移入もあったと考えられるが、朝鮮半島とわが国の民間療法に関する比較研究についてはまとまったものを見ない。現在韓国では身土不二の考え方が広く受け入れられ、民間療法的な効能がとくに食材に求められている。なお韓国は、以前は生薬輸出国であったが、現在ではわが国と同様、輸入量の方が圧倒的に多くなっている。すなわち、韓国においても国産生薬が消滅しつつある。

### (3) その他

環日本海域と呼べる厳密な地域において、現時点で薬物資源の情報に関する空白地帯はロシアの沿海州である。これまで住民が少なく、まとまった文化と呼べるものが育ち得なかったことが理由であるが、そのために現在も原野は自然な状態で保存されており、今後の詳細な研究が待たれる。2004年の筆者らによる調査では、自然は豊富に残されているが、地元住民による天産品の薬用利用はほとんどなく、移入者はもっぱら祖国から持参し栽培するヨーロッパ薬物を利用している現状が明らかになった。今後、イヌイットなど原住民による薬物利用の現状を調査する必要がある。

一方、厳密な環日本海域からは離れるが、中国大陸の薬物資源は国土が広大であるだけに膨大で、かつ古来わが国の医療文化に多大な影響を与えてきた史実に鑑みると、環日本海域の薬物資源を論じる上で避けて通れない。中国大陸の大半は、植物地理学的に日華区系と呼ばれる区域に属し、わが国と植物相が共通している。紙面の関係上、詳細は他書に譲りたい。

## 3. 日本民間薬のルーツ

日本各地に民間療法があり、その中で植物資源も利用されている。ゲンノショウコ、センブリ、オオバコなどよく知られた民間薬がはたして倭民族によって開発されたものであるか否かを論じることはむずかしい。筆者のこれまでの私的な研究では、少なからず中国明代の書物である『本草綱目』の影響を受けているように思われる。詳細な比較研究は今後に待たねばならないが、少なくとも2~3割の民間療法が『本草綱目』の影響を受けているのではないかと考えている。

日本全国の民間薬を網羅することは容易ではない。ここでは、本プログラムの拠点地である石川県能登半島の薬用植物リストを章末に付した。また、先述したように、わが国の民間薬は『本草綱目』の影響を受けていることが考えられる。今後の研究課題である。

一方、わが国の医療は、先述の如く当初は朝鮮半島

からの移入に頼っていた。その後も、朝鮮半島からの移入は継続的に行なわれて来たものと思われ、朝鮮半島における民間薬がもたらされた可能性も大きい。この点に関する詳細な研究も未だない。最近になって、釜山大学の朴鍾喜教授が韓国民間薬を調査され、まとめて報告されたので参考にされたい。

## 4. 資源の現状と確保

### (1) 資源の有効利用

文明化が進めば進むほど自然破壊が進行し、天然資源は減少する。しかし、生薬資源が元来野生品であったことは紛れもない事実であり、今後でもできる限り上手に自然の恵みが受けられるよう努力すべきである。そういった意味で、今一度、原点に帰って野生品の資源確保と種々の問題点について考えてみることにしたい。

資源的にみれば、野生品であるという弱点は、ある年に無計画に採集すると次の年には必ず資源が減少する点である。1年草、2年草のものはまだしも、オウレン（黄連）やチクセツニンジン（竹節人參）などの多年草、オウバク（黄柏）やホウノキ（厚朴）などの木本類では、薬用部の生長に数年から十数年を要する。このような生薬は一度根こそぎ採集してしまうと、その資源の回復に多年を要するのは当然で、なかには完全に絶滅してしまうものもある。

採集量はその生物の再生産能力を上廻れば、その生物の絶対数が減少するのは当然の理で、また生育時間の長い植物ほど資源の回復に時間がかかることも至極当然のことである。そのため薬用植物の栽培が種々研究され、ある程度の成功をおさめてはいるが、これらの手段はすべての植物種に対して有効ではなく、多くの研究課題が残されている。

天然物である生薬の利用は、他の合成薬物に比べ、きわめて手軽であった。しかしそれは資源問題をそれほど深刻に考えない時代のことであって、今日では幾多の問題点が指摘されている。天然品であるため品質の一定化が困難なこともその一つである。また先にも述べた如く、需要と供給の調和が計画通りになりにくいのも弱点の一つである。さらに合成品の場合は、需要が高まれば生産量を多くし、またその価格も下がるのであるが、天然品では、生産量はその時点で限られてくるので、需要が高まれば価格が上がり、しかも粗悪品まで出荷されるので品質が劣ってくる。商品が豊富な時には安くて良質のものが供給できるのに、商品が少なくなると劣品で値が高くなるという矛盾が起こるのである。この矛盾を解決するためには、日本のみならず、世界的視野で資源確保の計画を建てる必要がある。

### (2) 里山の薬用植物と現状

里山は、継続的な人的利用により維持されて来た自

然環境である。いわゆる雑木林、山間部の田畑やその周辺などである。雑木林内の樹木は、日々の燃料用に常に芝刈り（焚き木拾い）が行なわれ、また定期的に薪炭用に伐採されてきた。そうした行為により林内には適度な日照、風通し、空間が確保され、里山の植物に多様性をもたらしてきた。もちろん、その中には有用植物も多く生え、同時に利用されてきた。

昨今の里山は、人口の都市集中、文明化による生活様式の変化などにより従来の機能を果たす価値がなくなり、放置されるようになった。その結果、たとえば放棄された竹林の拡大、雑木の密集、笹の侵入などにより、従来の生物多様性が低くなっている。こうした現象は日本各地で問題になっている。またこんな話もある。佐渡は昔はキク科のホソバオケラ（蒼朮）を畑の一角に半野生状態で栽培し、採集していた。その頃は畑を年に何度かはクワや鋤で掘り返していた。その度にホソバオケラの根茎は小さく切断され、どんどん株を増やしていった。ところが最近では畑作にも余力が入れられなくなり、蒼朮は掘られる一方で増えることがなく、今ではめったに見られなくなってしまったというものである。

これからもこういった現象は文明の発展とともにどんどん進行していくであろう。これを元に戻すには相当の人為的な努力を払わないと到底できないことである。

こうした現状はいわゆる里山の自然が破壊される中で進行しつつあり、自然保護のみが薬用資源の確保の方法ではないという複雑な状況を示している。里山の自然こそはヒトが従来どおりに手を入れて守るべきものであり、里山の保護は薬用植物資源確保の上でも重要なことであることはあまり認識されていない。表1の半数以上は里山に見られる植物である。里山の保全こそがもっとも身近な薬用資源保護であることはあまり認識されていない。

## 5. まとめ

以上、ここに述べたような調査研究は純然たる自然科学と言うよりは、人文科学の領域を包含したもので、よって自然科学領域では価値が認められにくい。環日本海域の薬用資源を調査する上で避けて通れない。また、ヒトが常に周囲の植物とかかわって来たことを考えると、本プログラムを推進するためには今後はこうした文化人類学的な研究が不可欠であることは自明である。関連する資料は膨大である。この種の研究の完成には各地の有識者からの情報が不可欠である。関連するネットワークの構築が期待され、我々も努力したい。

## 付表：能登半島に見られる薬用植物一覧

(主たる参考文献：向平権六『能登の薬草』)

( ) 内は漢方生薬名

### アカザ科 **Chenopodiaceae** :

アカザ, アメリカアリタソウ, ケアリタソウ, シロザ.

### アカネ科 **Rubiaceae** :

アカネ (茜草, 茜根), クチナシ (山梔子), フタバムグラ, ヘクソカズラ.

### アカバナ科 **Onagraceae** :

マツヨイグサ.

### アケビ科 **Lardizabalaceae** :

アケビ (木通), ミツバアケビ (木通), ゴヨウアケビ, ムベ.

### アブラナ科 **Cruciferae** :

ダイコンソウ, ナズナ (テイレキシ). アヤメ科 **Iridaceae** : サフラン (栽培).

### イグサ科 **Juncaceae** :

イ (灯芯草).

### イチイ科 **Taxaceae** :

イチイ, カヤ (榧子).

### イチヤクソウ科 **Pyrolaceae** :

イチヤクソウ.

### イネ科 **Gramineae** :

イネ (栽培) (粳米), カモガヤ, カリヤス, ササクサ (淡竹葉), ジュズダマ (川穀), ススキ, チガヤ (茅根), ハルガヤ, マコモ, ヨシ (蘆根, 葦茎).

### イラクサ科 **Urticaceae** :

イラクサ.

### ウキクサ科 **Lemnaceae** :

ウキクサ (浮萍草).

### ウコギ科 **Araliaceae** :

ヤマウコギ (五加皮), ウド (和羌活), キツタ, タラノキ, チクセツニンジン (竹節人參), ハリギリ. ウマノスズクサ科 **Aristolochiaceae** : ウマノスズクサ (青木香), ヒメカンアオイ (杜衡).

### ウリ科 **Cucurbitaceae** :

アマチャズル, カラスウリ, キカラスウリ (括樓根, 括樓仁).

### ウルシ科 **Anacardiaceae** :

ウルシ (栽培) (乾漆), ヌルデ.

### エゴノキ科 **Stylacaceae** :

エゴノキ.

### オオバコ科 **Plantaginaceae** :

オオバコ (車前草, 車前子).

### オトギリソウ科 **Hypericaceae** :

オトギリソウ (小連翹), トモエソウ.

### オミナエシ科 **Valerianaceae** :

オミナエシ (敗醬根), オトコエシ.

### オモダカ科 **Alismataceae** :

オモダカ, クワイ (慈姑), サジオモダカ (沢瀉).

### ガガイモ科 **Asclepiadaceae** :

イケマ, ガガイモ (蘿摩子).

### カタバミ科 **Oxaridaceae** :

カタバミ (酢漿草).

### カバノキ科 **Betulaceae** :

ツノハシバミ.

### ガマ科 **Typhaceae** :

ガマ, ヒメガマ (蒲黄).

### カヤツリグサ科 **Cyperaceae** :

ウキヤガラ, カヤツリグサ, クログワイ (勃薹, 烏芋), ハマスゲ (香附子).

### キキョウ科 **Campanulaceae** :

アゼムシロ, キキョウ (桔梗), サワギキョウ, ソバナ, ツリガネニンジン (沙参), ツルニンジン (蔓参).

### キク科 **Compositae** :

アキノキリンソウ, アキノタムラソウ, アキノノゲシ, エゾタンポポ (蒲公英), オオジシバリ, オグルマ (旋覆花), オケラ (白朮), オナモミ (蒼耳子), カワラニンジン, カワラヨモギ (茵陳蒿), コオニタビラコ, コセンダングサ, サワオグルマ, サワヒヨドリ, ジシバリ, シラヤマギク, センダングサ, タウコギ, タカサブロウ, ツワブキ, トキンソウ, ニガナ, ノアザミ (小薊), ノコンギク, ノボロギク, ハハコグサ, ハマヨモギ (茵陳蒿), ハンゴンソウ, ヒゴタイ (漏芦), フキ, メナモミ, モミジガサ, ヤクシソウ, ヤブタバコ, ヨツバヒヨドリ, ヨメナ, ヨモギ (艾葉), リュウノウギク.

### キツネノマゴ科 **Acanthaceae** :

キツネノマゴ.

### キブシ科 **Stachyuraceae** :

キブシ.

### キョウチクトウ科 **Apocynaceae** :

テイカカズラ (絡石藤).

### キンポウゲ科 **Ranunculaceae** :

アキカラマツ, イヌシヨウマ, ウマノアシガタ, キクバオウレン (黄連), キツネノボタン, サラシナシ

ヨウマ (升麻), センニンソウ (威霊仙), タガラシ,  
トリカブト類 (烏頭, 附子), ニリンソウ.

クスノキ科 **Lauraceae** :  
オオバクロモジ (鉤樟皮, 烏樟), タブノキ.

クマツヅラ科 **Verbenaceae** :  
クサギ, クマツヅラ (馬鞭草), ハマゴウ (蔓荊子).

グミ科 **Elaeagnaceae** :  
アキグミ.

クルミ科 **Juglandaceae** :  
クルミ (胡桃仁), サワグルミ.

クロウメモドキ科 **Rhamnaceae** :  
クロウメモドキ (鼠李子), ケンポナシ (枳具子),  
ホナガクマヤナギ.

クワ科 **Moraceae** :  
クワ (桑白皮, 桑葉), コウゾ (猪実子), ヤマグワ  
(桑白皮, 桑葉), カナムグラ, カラハナソウ.

ケシ科 **Papaveraceae** :  
クサノオウ, タケニグサ, ヒメエンゴサク (延胡索), ミ  
チノクエンゴサク (延胡索), ヤブエンゴサク (延胡索).

ゴマノハグサ科 **Scrophulariaceae** :  
オオヒナノウスツボ (玄参), カワジシャ, キリ, ク  
ガイソウ (草本威霊仙).

サクラソウ科 **Primulaceae** :  
コナスビ.

サトイモ科 **Araceae** :  
カラスビシャク (半夏) ヒメザゼンソウ, ショウブ  
(白菖蒲), セキショウ (菖蒲).

サルナシ科 **Actinidiaceae** :  
サルナシ, マタタビ (木天蓼).

シソ科 **Labiatae** :  
イヌコウジュ, ウツボグサ (夏枯草), エゴマ, オド  
リコソウ (続断), カキドウシ (連銭草), カワミド  
リ (藿香), キセウタ, キランソウ, クルマバナ, ク  
ロバナヒキオコシ, シロネ, タツナミソウ, ナギナ  
タコウジュ (香薷), ニガクサ, ハッカ (薄荷葉),  
ヒキオコシ, ヤマジソ.

ショウガ科 **Zingiberaceae** :  
ミョウガ (生姜).

スイカズラ科 **Caprifoliaceae** :  
スイカズラ (金銀花), ソクズ, ニワトコ (接骨木).

スイレン科 **Nymphaeaceae** :  
コウホネ (川骨), ジュンサイ, ハス (栽培) (藕節,  
蓮子, 荷葉).

スギ科 **Taxodiaceae** :  
スギ.

スベリヒユ科 **Portulacaceae** :  
スベリヒユ (馬齒莧).

スミレ科 **Violaceae** :  
スミレ (紫花地丁), タチツボスミレ.

セリ科 **Umbelliferae** :  
ウマノミツバ, シャク, セリ, チドメグサ, ツ

ボクサ, ノダケ (前胡), ハナウド (白シ), ハ  
マボウフウ (明党参), ミヤマシシウド (和独活),  
ヤブジラミ (蛇床子), ヤブニンジン.

センリョウ科 **Chloranthaceae** :  
ヒトリシズカ.

タケ科 **Bambusaceae** :  
チマキザサ, ネマガリダケ, ハチク (竹葉, 淡  
竹葉).

タデ科 **Polygonaceae** :  
イシミカワ, イタドリ (虎杖根), イヌタデ, オ  
オケタデ, ギンギシ (羊蹄根), サクラタデ, ス  
イバ, ニワヤナギ (扁蓄), ハルトラノオ, ミゾ  
ソバ, ヤナギタデ.

ツツジ科 **Ericaceae** :  
ネジキ, ハナヒリノキ, レンゲツツジ.

ツヅラフジ科 **Menispermaceae** :  
アオツヅラフジ (木防已), オオツヅラフジ (防已).

ツバキ科 **Theaceae** :  
ヤブツバキ, ユキツバキ.

ツユクサ科 **Commelinaceae** :  
イボクサ, ツユクサ (鴨跖草).

トウダイグサ科 **Euphorbiaceae** :  
アカメガシワ, タカトウダイ (大戟), ナツトウ  
ダイ (甘遂).

ドクダミ科 **Sururaceae** :  
ドクダミ (魚腥草), ハンゲショウ.

トチノキ科 **Hippocastanaceae** :  
トチノキ.

トベラ科 **Pittosporaceae** :  
トベラ.

ナス科 **Solanaceae** :  
イヌホウズキ, ハシリドコロ, ハダカホウズキ.

ナデシコ科 **Caryophyllaceae** :  
ウシハコベ, カワラナデシコ (瞿麦子), ハコベ.

ニガキ科 **Simaroubaceae** :  
ニガキ.

ニシキギ科 **Celastraceae** :  
ツリバナ, マユミ.

ニレ科 **Ulmaceae** :  
エノキ.

ノウゼンカズラ科 **Bignoniaceae** :  
キササゲ (梓実).

ハエドクソウ科 **phrymaceae** :  
ハエドクソウ.

ハマウツボ科 **Orobanchaceae** :  
ハマウツボ.

バラ科 **Rosaceae** :  
カジイチゴ, カワラサイコ, キンミズヒキ (龍牙草),  
クサイイチゴ, クマイイチゴ (覆盆子), テリハノイバラ,  
ナナカマド, ナワシロイチゴ, ノイバラ (営実), ハ  
マナス, モミジイチゴ (覆盆子), ワレモコウ (地榆).

ヒガンバナ科 **Amaryllidaceae** :  
 キツネノカミソリ, スイセン, ナツズイセン, ヒガンバナ (石蒜).

ヒシ科 **Trapaceae** :  
 ヒシ (菱実).

ヒノキ科 **Cupressaceae** :  
 アスナロ (栽培), ヒノキ, ネズ (杜松子).

ヒメハギ科 **Polygalaceae** :  
 ヒメハギ.

ビャクダン科 **Santalaceae** :  
 カナビキシソウ (土夏枯草).

ヒユ科 **Amaranthaceae** :  
 イヌビユ, ヒナタイノコヅチ (牛膝).

ヒルガオ科 **Convolvulaceae** :  
 ネナシカズラ (菟絲子), ハマヒルガオ (菟絲子), ヒルガオ.

ヒルムシロ科 **Potamogetonaceae** :  
 ヒルムシロ.

フウロソウ科 **Geraniaceae** :  
 ゲンノショウコ.

ブドウ科 **Vitaceae** :  
 エビヅル, ノブドウ, ヤブガラシ, ヤマブドウ.

ブナ科 **Fagaceae** :  
 ウラジロガシ, クヌギ, コナラ.

ベンケイソウ科 **Crassulaceae** :  
 キリンソウ.

ホシクサ科 **Eriocaulaceae** :  
 ホシクサ (穀精草).

ボタン科 **Paeoniaceae** :  
 ヤマシャクヤク (芍薬).

マツ科 **Pinaceae** :  
 アカマツ, クロマツ.

マツムシソウ科 **Dipsacaceae** :  
 ナベナ.

マメ科 **Leguminosae** :  
 アカツメクサ, エゾノレンリソウ, カワラケツメイ, クズ (葛根), クララ (苦参), サイカチ, ジャケツイバラ, トキリマメ, ネムノキ (合歡皮), ハマエンドウ, フジ, ホド, メドハギ, ヤマハギ, レンリソウ.

マンサク科 **Hamamelidaceae** :  
 マルバマンサク.

ミカン科 **Rutaceae** :  
 イヌザンショウ, カラスザンショウ, キハダ (黄柏), コクサギ (和常山), サンショウ (山椒), ミヤマシキミ.

ミズアオイ科 **Pontederiaceae** :  
 コナギ.

ミズキ科 **Cornaceae** :  
 ヒメアオキ.

ミソハギ科 **Lythraceae** :  
 ミソハギ.

メギ科 **Berberidaceae** :  
 トキワイカリソウ (淫羊藿), ヒロハヘビノボラズ, メギ (小蘗).

モウセンゴケ科 **Droseraceae** :  
 モウセンゴケ.

モクセイ科 **Oleaceae** :  
 アオダモ, イボタノキ, ネズミモチ (女貞子).

モクレン科 **Magnoliaceae** :  
 キタコブシ (辛夷), サネカズラ (南五味子), タムシバ (辛夷), ホウノキ (厚朴), マツブサ.

モチノキ科 **Aquifoliaceae** :  
 モチノキ.

ヤドリギ科 **Loranthaceae** :  
 ヤドリギ (桑寄生).

ヤナギ科 **Salicaceae** :  
 イヌコリヤナギ, ウラジロハコヤナギ, カワヤナギ.

ヤブコウジ科 **Myrsinaceae** :  
 ヤブコウジ (紫金牛).

ヤマゴボウ科 **phytolaccaceae** :  
 ヤマゴボウ (商陸).

ヤマノイモ科 **Dioscoreaceae** :  
 オニドコロ, ヤマノイモ (山薬).

ユキノシタ科 **Saxifragaceae** :  
 アカショウマ, ウツギ, ダイモンジソウ, トリアシショウマ, ヤシヤビシヤク.

ユリ科 **Liliaceae** :  
 アマドコロ (玉竹), アマナ, ウバユリ, エンレイソウ, オオバギボウシ, オニユリ (百合), オモト, コバギボウシ, ササユリ (百合), サルトリイバラ (山帰来), ジャノヒゲ (麦門冬), ツクバネソウ, ツルボ, ナルコユリ (黄精), ニラ (韭菜子), ノギラン, ノビル, ヤブカンゾウ, ヤブラン (麦門冬).

ラン科 **Orchidaceae** :  
 エビネ, サイハイラン, サワラン, シュンラン, シラン, ツチアケビ.

リンドウ科 **Gentianaceae** :  
 エゾリンドウ (龍胆), センブリ.

羊歯類: イヌガンソク (貫衆), イノモトソウ, ウラジロ, オシダ (貫衆), カニクサ (海金砂), クジャクシダ, クマワラビ, スギナ (問荊), ゼンマイ, ノキシノブ (瓦葺), ヒカゲノカズラ (石松子), マンネンスギ, ミツデウラボシ, ヤブソテツ (貫衆), ワラビ.

菌類: ケムリタケ, カワラタケ, コフキサルノコシカケ (桑寄生), シイタケ, マツホド (茯苓), メシマコブ (桑寄生).

海藻類: ワカメ (海帶). (以上)